

書評

『三輪寿壮 大衆と歩んだ信念の政治家』  
(三輪建二著 鳳書房)

山脇直司

はじめに

1949年3月生まれの私にとって、今はなき日本社会党は馴染みのある政党であった。当時の大物党员として、1960年10月12日に壇上で刺殺された浅沼稻次郎をはじめ、河上丈太郎、江田三郎、佐々木更三、鈴木茂三郎、勝間田清一、成田知己、河野密などが思い浮かぶし、社会党から別れて民社党党首となった西尾末広もテレビでよく目にした一人である。とはいえ、私の記憶は、どんなに遡っても1957年頃までであり、右派と左派に分かれていた社会党が統一された1956年以前の事態は、書物やメディアを通して学んだのみである。しかし、右派と左派が統一される際に大きな役割を演じた三輪寿壮(1894-1956、以下、三輪と表記)という人物については、研究書が不足していたこともあり、本書を手取る前にはほとんど知らなかった。それだけに、本学に赴任された三輪建二教授(以下 著者と表記)による500ページにわたるこの大著を手にした時は、私が公共哲学を専門の一つにすることも相まって、新鮮な驚きを感じ、大きな興味を抱いて一気に読み終えた次第である。

本書の意図と構成

著者は三輪寿壮の孫に当たるが、本書は主に、三輪の私的側面ではなく、三輪の政治家かつ弁護士としての「公共的側面」について、それを支えた思想と信念の推移に着目しつつ詳細に描き出した労作と言ってよい。著者によれば、「三輪にとって40年間にわたる弁護士活動、労働運動、農民運動、無産政党運動、政治家としての活動はたがいに切り離せず、そのすべてに通じる一本のゆずれない信念や思想があった」(iv頁)。それは一口に人道主義と呼ばれるものであり、彼が生きた時代の激動によって多少の揺らぎはあっても、終生変わらなかった。その揺らぎと一貫性を、膨大な資料に基づきつつ、彼が生きた時代のナショナルヒストリーとの絡みの中で読み解いた点に、何よりもこの書の大きな特色と意義がある。

本書は、生い立ちと学生時代(1894~1920年)、弁護士・社会運動家から政治家へ(1920~1932年)、国民と国家のはざま(1932~1940年)、総力戦と公職追放(1940~1949年)、民主社会主義と日本社会党統一(1949~1956年)、出会いと交流、という構成で記され、各章には当時の数多くの写真と三輪の私的側面を述べたこぼれ話が挿入されている。その大まかな内容を、私自身の印象を混ぜ合わせながらまとめてみよう。

各章のあらすじ

第一章の「生い立ちと学生時代」では、経営者であった父の下で重労働を強いられた労

働者たちの姿がずっと心に引っ掛かり、「商人になるのは死ぬより嫌だ」とまで父に言い放って、社会主義的な政治家をめざす若き三輪の姿が描かれる。(7-16頁)。旧制一高から東京大学法学部という当時の超エリートコースを歩みながら、吉野作造の民本主義に傾倒し、森戸辰男事件に衝撃を受け、社会に奉仕する道を選んだ若き三輪の思想の原点(27-44頁)は興味深い。

続く第二章では、大学卒業後に弁護士となり、多くの労働争議や小作争議に関わりながら、賀川豊彦との出会いによって彼の信念が強化され、人道的博愛主義に発展したこと(47-63頁)、私利私欲や名利を捨てて公のために尽くす観点から、マルクス主義者とは一線を画しつつ、無産政党の立ち上げに深くかかわったこと(81-98頁)などが描かれている。

そして、第三章と第四章では、日本が戦争に突き進んでいった昭和前期において、三輪が社会大衆党の議員となり、ファッション政治を批判しつつ、蠟山政道や三木清らの昭和研究会から影響を受けて、欧米の植民地主義に対抗するため、中国との連帯も視野に置いた東亜協同体(後の大東亜共栄圏とは異なる)らを模索しながらも挫折し(125-163頁)、大政翼賛会へと取りこまれていった苦渋の姿が描き出される(183-200頁)。

第五章は、公職追放後に弁護士としてカムバックし、西尾末広の政治献金事件の弁護などに深くかかわった後に、平和主義と民主主義を擁護する立場から護憲運動に積極的に加わり、マルクス主義を基調とする左派社会党ではなく、議会制民主主義と基本的人権擁護を党是とする右派社会党の重鎮として三輪の姿が克明に記される。三輪は、保守合同への対抗軸を示すためには、二派に分裂している社会党が統一されなければならないという信念から、社会党の統一に大きな精力を注ぎ、その成果の大きな代償ともいえる病で1956年に逝去する(223-264頁)。

### 三輪の思想の総括と現代へのメッセージ

以上のあらすじをふまえながら、著者は第六章で、三輪の思想の総括を試みているが、特に興味深かった「三輪が残した後世への課題」(352-356頁)について、公共哲学を専門の一つとする立場から、若干コメントしておこう。

著者は、三輪が私利私欲を捨てて公に尽くすという信念を抱くあまり、自由主義を警戒し、国家の管理に軸足を移す姿勢に陥ってしまったとみなし、もう少し個人の自立と自律を軸足に据えた自由主義的な信念と思想があってもよかったと述べている。また、三輪が民主主義を啓蒙するという「上から目線」に立っていたことを批判し、熟議民主主義的な発想に立つ必要を説いている。実は、私も2004年刊行の『公共哲学とは何か』(ちくま新書)以降、従来の公私二元論とは異なる「民の公共(the public)、政府の公(the official)、私的領域(private realm)」の相互作用的な三元論に基づく民主主義的な意思決定と、「滅私奉公」ではなく、「一人一人を活かしながら公共世界と関わる「活私開公(かっしかいこう)」の理念によって、「個人の自由(尊重)」と「公共の福祉」を両立させる理論を展開しており、著者の見解と図らずも一致したことに驚きと喜びを覚えた。それ故、そのような公共哲学を活かす政治が不在の現代日本にあって、三輪のような志の高い政治家の再現を強く望んで、この書評を締めくくりたい。